

レポート・第29回日本李登輝学校台湾研修団

先生方の魂の限りの講義に感銘

國學院大学四年生 関口 幹久
せきぐち かんく

第一日 五月四日(金)

今回、今年の五月四日から五月八日まで行われた「第二十九回日本李登輝学校台湾研修団」(略称、李登輝学校研修団。江成雅子^{えがまさこ}団長、村上秀次^{むらかみしゅうじ}副団長)に初めて参加させていただきました。参加者は日本各地から集まり、総勢三十六名。参加者の中には台湾に造詣が深い方はもとより、老若男女問わず様々な分野の方が集まり、活発に議論を交わすことができましたので非常に有意義な研修となりました。

初日は台北松山空港にて全研修団員が集合した後、国内線で台東まで移動し、台東到着後は娜路彎^{ナルワン}大酒店に移動し始業式を行いました。

始業式では、初めに蔡焜霖^{さいこんりん}先生からお言葉をいただきました。次いで各人の自己紹介が行われました。多くの方が様々な思いで参加されていることが判り、充実した時間でした。

第二日 五月五日(土)

二日目は緑島にて野外研修が行われました。緑島まではホテルからバスで二十分ほどの場所にある富岡漁港に移動し、そこから船で緑島に。緑島までは一時間の船旅でしたが、波が多少出ていたため酔う人が続出。しかしながら、緑島に上陸し野外研修が始まると全員回復いたしました。

上陸後は車輛に分散乗車し、緑島人權文化園区に移動。初めに、白色テロ

にて受難された方のお名前が刻まれた人權記念碑を見学。その後、人權文化園にて、蔡先生も出演されているビデオで緑島や白色テロのことを学びました。ビデオの中で特に印象に残っているのが、白色テロの犠牲となった自分の祖父のルーツを探る女性の物語です。蔡先生や様々な人とともに自分の祖父の生きた道を探す、私と同世代の女性の姿に心を打たれました。そして何より遺書すら当局によって隠されていたという異常事態に驚きました。

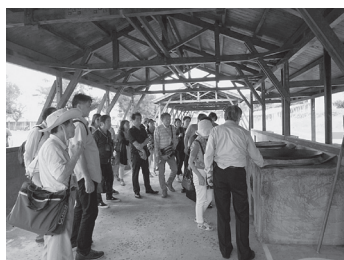
昼食後は先生が実際に収容されていた新生訓導所や博物館、政治犯収容所を見学した後に先生の講義を拝聴しました。講義は先生の生立ちに始まり、受難された経緯や訓導所での生活、当

時の心境などをお聞きしました。特に共産主義者や三民主義はこの島に来て知ったこと、知識人層が収容されていたので、村人に医療を提供したり、看守の子供に勉強を教えたこと、大陸反攻は不可能というのが受難者の間では共通見解であったこと等、目から鱗の話を数多く聞くことができました。

私は情けないことに、この島に来るまで白色テロのことをほとんど知りませんでした。しかし、博物館の展示物や一人ひとりのお名前が刻まれている碑、そしてなにより、実際にこの恐怖を体験した先生のお話を聞くことにより、事実が克明となるにつれ、次第に知らなかった自分が恥ずかしくなりま



蔡煥霖先生（5月5日）



蔡煥霖先生（5月5日）



范健祐先生（5月7日）



林彦宏先生（5月7日）

した。なぜ読書会に参加していただけたのか、なぜ半世紀にわたり我々と同じ時間を歩いてきた台湾に住む人が突然このような仕打ちを受けなければならなかったのか。単純な疑問ではない、様々な思いが私の胸を交差しました。

第三日 五月六日(日)

この日は緑島から台東にフェリーで戻り、その後、太魯閣号^{タロコ}にて台北に戻りました。太魯閣号は九州で走っているソニックが原型ですので乗り心地は非常に良いものでした。

緑島では時間がありましたので、蔡

先生に様々な質問をすることができました。特に私は現在教員になるための勉強もしていますので、日本時代の教育について興味を持っていて、当時の台湾の子供たちの国姓爺の話や、乃木大将と東郷元帥はどちらが偉いかといった話を興味深くお聞きしました。

第四日 五月七日(月)

この日は慶泰大飯店にて朝から先生方の講義を拝聴いたしました。第一講目は、『湾生回家』のプロデューサーである范健祐先生^{はんけんゆう}の『湾生回家』から見た日台関係^{にったいかんけい}のご講義。

私にとって映画『湾生回家』は台湾を知ったきっかけの一つでしたので、

映画の裏話などを知り良かったです。

また吉安郷に保存されている慶修院の話も興味深く、慶修院は真言宗寺院として建てられたものの、神道を取り入れているとのことでした。先生は、神仏宗教の力で移民した人々の心を慰めていたのではないかとおっしゃっていました。その慶修院は一度は荒れ果てましたが、現在は再生され第三級文化財になっているとのことでした。

第二講は「国際社会における台湾」という演題で、国立中正大学戦略及国際事務研究所助理教授の林彦宏先生の講義を拝聴、風雲急を告げる日台中の関係を台湾を軸に学びました。

講義は台湾が初めての私でも分かるような内容で、台湾の概況や一九七二年の日台断交以降の日台関係、そして台湾の内政や経済、外交、軍事など多岐にわたり学ぶことができました。その中でも台湾と日本の人的往来が日本人訪台者百九十万人に對し、台湾人訪日者が四百五十六万という状況に大変

驚きました。台湾の日本への片思いというのはこのような場所でも起きています。そして今、日本はこの片思いに速やかに振り向かなければならないと強く思いました。

昼食の後の第三講は、靜宜大学日本語文学系副教授の賴衍宏先生による「台湾の日本語歌碑」について。

先生の研究は、忘れ去られようとしている日本時代の短歌結社を中心に、歌詞・歌集・歌人という三つの切り口から体系的にまとめられたそうで、非常に分かりやすく、短歌に造詣が浅い私でも十分に理解することができた内容でした。特に印象に残ったのは、全国の学生に歌を募集し『統支那事変歌集』に掲載された李登四郎の「皇のみたてと散りし将兵の御霊迎ふる駅のしずけさ」という歌です。御霊を思うという今の日本人が忘れていている心がよく表れております。

第四講は、沼田幹夫・日本台湾交流協会台北事務所代表による「日台関係

の現状及び今後の展望」です。

講義は、馬英九時代における東日本大震災や日台漁業協定により日台の友好が深まった話から始まり、蔡英文政権の評価や兩岸関係、カリスマ指導者の必要性など多岐にわたり、瞬きがないほど濃密な九十分でした。

そして、いよいよ李登輝先生の登場です。先生は昨秋の研修団の時には体調を崩されており、今回も出席されないのではと危惧していましたが、心配は杞憂に終わり、すこぶる元気な足取りで壇上に進まれました。李登輝先生の講義が始まると、会場はこれまで以上に空気が引き締まりました。

先生は「司馬さんの台湾」という演題で、司馬遼太郎先生の思い出や、東日本大震災の折は台湾同胞が日本へ関心を寄せて絶えざる人的交流ができたのは司馬先生の書かれた『台湾紀行』のお蔭であると強調されました。終戦後、そして七十二年と二度にわたり台湾を見捨てた日本の冷淡さは、司馬先

生が台湾を訪れて台湾の人に勇気を与えたことにより帳消しになったとまでおっしゃいました。そして何より、李

登輝先生は司馬先生が台湾の民主政治の確立を待たずに逝去されたことを深く悲しんでおられました。

私は李登輝先生のお話を拝聴し、日台の友好を築いて下さった先人の方々のために、そして未来の日台のために今できることを身を惜しまず行い、そのために日々努力・精進しなければならぬと思われました。

特別講義の後は李登輝先生より直々に「修業証書」をいただきました。ただ、先生の体調が優れないとのことでしたので、その後の晩餐会は李登輝基



賴衍宏先生（5月7日）



沼田幹夫先生（5月7日）



李登輝先生（5月7日）



李雪峰先生（5月8日）

金会の王燕軍秘書長が代理で出席されました。

第五日 五月八日（火）

研修最終日のこの日は、朝から台湾高座台日交流協会理事長の李雪峰先生より台湾少年工をめぐるご講義です。

先生は少年工として昭和十八年五月に大和に入られ、以来、終戦までの二年三カ月を少年工として日本で過ごされました。先生の講義で特に印象に残っているのが「私は皆さん以上に日本人です。『君が代』は歌えますか？」という一言です。私は、この一言こそ今回の研修を締めくくるに相応しい言葉だと感じました。恐らくこの言葉は

蔡先生も、李登輝先生も思っていた言葉だと思います。日本人だったという誇り、そしてその誇りを忘れかけている後輩たちを憂う言葉。その誇りを伝えるために、先生方は魂の限り講義を下さいました。研修団員もまた、先生方の魂の叫びを魂の限り受け止めておりました。

私は師弟関係にも似た清らかで美しい姿に深い感銘を受けるとともに、心の底から今研修団に参加してよかったと思いました。叶うならぜひ秋の研修団にも参加したいと考えております。最後になりましたが、ご講義をいただいた先生方をはじめ、事務局の皆様